

## 博覽會の洋畫

東京美術學校教授 黒田清輝君

博覽會の洋畫に就きては、世評甚だ宜しからず。或は洋畫界一般の奮發なかりしを難じ、或は出品の多くが、價値少きを痛論す。左に掲げたるは、洋畫界の泰斗黒田氏が『太陽』記者に向つて語られたるもの、要旨なり。

博覽會の洋畫については、實に案外に感<sup>マ</sup>しました。と言ふは、繪畫の出來が善い悪いの事では莫く、出品數が、如何にも少數であつたことです。新聞でも御存知の通り、鑑査を<sup>マ</sup>出願したのが、僅に百十二點で、出品を許可されたのが、四十七點といふ少數ですから、前回の博覽會の時に比して、如何程の違もなかつたのです。

出品が少數であつた許りで莫く、立派な畫<sup>マ</sup>か少かつたのは遺憾です。殊に洋畫界の大家とも謂はれる人の畫が無かつたのは實に遺憾です。これは特別の原因があるでは莫くて東京洋畫界の一般が、一向に氣乗りがしなかつた爲であらうと思ひます。

彼の地でこそ博覽會に對する意氣組は、非常のものですが、東京人士に至つては實に冷淡です。従つて洋畫家も、敢て奮發しやうとも思はなかつたらしい。元來今日で、洋畫の中心となる地は、京大阪ではなくて、東京であるとは、衆目の見る所でありませう。其の中心たる地が、始めから氣乗がしなかつた。爲に博覽會会場内の洋畫は、實に寂寥たるものとなつたのでありませう。

畫の出來具合を見ますと、前回到に優つて居るとは、言ふ迄もない事ですが、尙ほ幼稚の譏は免れ難いやうです。特

に。新。ら。し。い。研。究。を。始。め。て。居。る。ら。し。い。様。の。痕。は。認。る。と。が。出。來。ま。せ。ぬ。ま。あ。只。塗。り。さ。へ。す。れ。ば。繪。が。出。來。る。と。思。ふ。て。居。る。人。が。多。い。や。う。で。す。是。れ。と。言。ふ。も。中。心。た。る。地。の。出。品。が。極。め。て。少。數。で。あ。つ。た。結。果。で。せう。

『太平洋』一五 明治三六年四月

前文にもあるように『太陽』掲載「名家談叢 洋畫談」(本書九三〜九六頁)を、第五回内国勸業博覽会出品の洋画に内容を絞つてまとめたもの。